書評・紹介

Lincoln H. Day, *Analysing Population Trends: Differential Fertility in a Pluralistic Society* LONDON:Croom Helm, 1983, 253pp.

著者のリンカーン・H・ディは，イエール大学社会学準教授から国連統計局人口社会統計課長を経て，現在オーストラリア国立大学人口学部の Senior Fellow 上級講師をしている社会人口学者である．人口学者といっても，数式を全く使わず，いわんや，複雑な数値計算による多変量解析とか，コンピュータ・シミュレーションによって人口動向を解析するのではなく，人口現象を社会経済の動きに照らして深く解釈するという解釈人口学者である．著者はコロンビア大学で Kingsley Davis の指導の下に Ph. D. を取得しているが，Davis の真骨頂は人口現象を Societal な社会全般の流れによって洞察するということであるので，ある意味では恩師 Davis に良く似た学風であると言える．

本書は，このようなコロンビア学風の伝統を生かしながら，実態調査に基づいてオーストラリアの差別出生力，とくに都市，農村間，異なった宗教，夫の職業，妻の教育程度，労働力参加の程度によって異なる出生力の水準を明らかにし，それがどうしてそのように異なるかの点を考察したものである．分析には，F検定も Multiple Classificaton Analysis も重相関分析も出て来ず，単純な組み合わせ集計の結果を解釈するというアプローチであって，いささか物足りないところもあるが，掲げられた表は差別出生力の要点を適確につく，よく選び抜かれた関連表ばかりで，その点敬服に価する．書き振りは平明であるが，非常にバランスのとれた文章で，常に客観的であり，物事を決して偏見とか先入観で判断しないアングロサクソン系独特の学風と，それにもまして人格者であり何事に対しても温く見つめるというデイ博士の人柄を反映している．

とくに面白いのは，オーストラリアの出生率が宗教の種類，とくにカソリック・非カソリックの違いに応じ非常に異なることの解釈であろう．日本人にとってキリスト教の真の性格は必ずしもよく理解できないところがあるが，カソリックはとくに婦人の行動様式に厳格で，今はやりの「女性の地位の向上」といった思想的，行動的潮流とはやや対照的な面を持っている．そのため，出生力がカソリックの間でかなり高い状況をもたらしていると言う．カソリックは核家族の伝統と価値（日本のような3世代世帯ではない），そして夫婦の役割の相違に関する教条を最も遵守している宗派で，独身での出産，同棲といった風潮に最も批判的である．

しかし，デイ氏の真骨頂は，「決論と含蓄」で述べられているような人口ゼロ成長を究極的に良しとする考え方であり，オーストラリアや米国のように国土が広く，人口密度が小さい国であっても，人口抑制がやがて必要となるという立場である．だから今のうちにでも避妊薬品や避妊具の入手性を完全にオープンにすべきだという見解である．彼は10数年前に Too Many Americans という本を書いて有名となったが，オーストラリアのような資源大国で密度が稀薄，かつ出生率が置き換え水準以下にある国でも，産児奨励政策 pronatalist policy をとることには断固反対の立場を取っている．

本書は Analysing Population Trends と動詞の進行形になっているところに特徴がある．格段に新しい出生力の仮説を樹て，その検証を行っているという気負った気配はなく，常識的な手法で常識的な結果を淡々とまとめている報告書であるが，その円熟した筆致と幅広い解釈の輪が次々と交響曲のように連なっているところには感心させられる．大学等で始めて人口学を学ぶ学徒にはきわめて有用な，出生力研究の入門書と言えよう．

（河野　稠果）